

としょかんNEWS 第104号



2015年11月18日
湘北短期大学図書館

さぼ一ち倶楽部、活動報告！

● 湘北祭に出店しました

10月17日(土)・18日(日)、第42回湘北祭が「Colorful～湘北にかかるアーチ～」をテーマに開催されました。

さぼ一ち倶楽部では、図書館オープンスペースに「アトリエさぼ一ち'15」を出店。今年はいロンビーズ作成、さぼ部メンバー手作りブックカバー販売の2コーナー設けました。初日はあいにくのお天気でしたが、2日目は好天に恵まれ、いロンビーズを楽しむ親子連れでにぎわいました。初挑戦のブックカバーは、さまざまな柄や素材の布で作られ、メンバーの個性あふれる作品に仕上がりました。また、当日はさぼ部OG(初代～3代目)の先輩方も応援に駆け付けてくれました。

2日間、図書館にお立ち寄りいただいた皆さま、ありがとうございました。



● 図書館総合展ポスターセッションに参加しました

11月10日(火)～12日(木)にパシフィコ横浜で「第17回 図書館総合展」が開催されました。図書館総合展は、さまざまな図書館についての最新技術・サービス・トレンド・学術情報を紹介する展示会です。

さぼ一ち倶楽部ではく図書館学生サポーター「さぼ一ち倶楽部」の革命」というテーマでポスターセッションに参加しました。ポスターセッションのコーナーには、図書館の取り組み紹介、研究成果の発表などのポスターが展示され、説明担当者と直接話すことができます。さぼ部メンバーも自分たちが作ったポスターの前に待機し、お越しいただいた方に活動内容を紹介しました。

また、図書館では今年からスタートした図書館キャラクターGP「館の働き者」部門に図書館キャラクター「さぼ一ち」をエントリー。12日(木)には、会場内で行われたプレゼンテーション大会にも参加しました。会期中、来場者による投票と審査員による投票を行い、各部門のグランプリが決定します。



今回ご紹介したいのは米原万理の『不実な美女か 貞淑な醜女か』(新潮文庫、1999)です。このタイトルを初めて目にしたときは「うん。どっちが良いのだろうか。」と考えてしまいましたが、これは顔の美醜や貞操観念等の話ではなく、「翻訳文の美しさ」についてのお話です。外国語を翻訳する際に原文の意図はくみ取れていないが、訳文としては整って美しい文である「不実な美女」か、それとも原文の意味を忠実に、正確に訳してはいるが、耳障りが悪い文である「貞淑な醜女」か。さて、どちらの訳が通訳者としてその場にふさわしいのか、というテーマなのです。著者の米原氏は、ロシア語の同時通訳者として名を馳せた方で、本書は同時通訳者としての経験談やこぼれ話が盛り沢山のエッセイです。

高校生の時に本書に出会い、10年以上経った今でも外国語の翻訳に苦心する度に、ふと思い出すお話があります。それは、著者が同時通訳の現場で「そういうのを日本ではね、『他人のふんどしで相撲を取る』というんだ」と憤慨する日本語話者の言葉をどう訳したか、という場面です。同時通訳という、いわば翻訳

の瞬発力が試される場でどう訳すのか。著者はとっさに諺の箇所を「他人のパンツでレスリングする」と訳しました。しかし結果として本来の意味が伝わりことなく、不潔感しか伝わらなかったと反省を述べています。

このお話を初めて読んだとき、訳語の可笑しさと翻訳を聞いてポカンとした人々の顔を想像してぐすりと笑いましたが、一方で言葉の先にある大きく開かれた世界を感じ、ワクワクしたことが忘れられません。言葉は機械のように字面のまま訳せば良いのではなく、言葉の裏側にある、双方の国の文化そのものを理解することこそが良い訳に繋がるということを教えられました。また、だからこそ翻訳を行うことの怖さと大変さを感じたのを今でも覚えています。

このエッセイを執筆するにあたって改めて本書を読み直しましたが、その面白さに通勤の電車の中で、一人で吹き出してしまい、咳をするふりをして誤魔化しました。本書はお勧めの一冊ですが、電車の中で読むことだけはあまりお勧めできません。

【連載】館長閑話(25) パルミラ遺跡から円明園を思う

館長 野口周一

今年起きた^{ゆゆ}忌々しき事件のひとつに、過激派組織「イスラム国」(IS)による世界遺産・パルミラ遺跡の破壊がある。同遺跡について、私も項目執筆をしている『世界史小辞典』改訂新版(山川出版社、2004年)に拠ると、「1~3世紀にシリア砂漠のオアシスに栄えた隊商都市。パルミラ商人はシリアとメソポタミアを結ぶ交易だけでなく、ペルシア湾からインド北西部へかけての海上でも活躍した」、3世紀半ば過ぎにはシリアを征服しエジプトまで進出したが、272年ローマ軍に敗れた、とある。

ISはイスラーム教の極端な解釈に基づき、同教が禁じる偶像崇拜につながるなどとして、シリアとイラクの支配地域で歴史的建造物や石像などの文化財の破壊を繰り返してきた。またキリスト教に関係ある建物を狙ったという説もある。要は象徴的な建物を破壊することにより、国際社会に力を誇示することを目的とする(「朝日新聞」2015年8月25日付)。

一方、中国・清朝の離宮で19世紀に西欧列強に破壊された北京の円明園を原寸で復元したテーマパークがオープンされた記事もあった(「毎日新聞」15年5月11日付)。この事件

はアロー戦争(1856~60)の最中、英仏連合軍が円明園の建物を破壊、宝物を略奪したと説明される。破壊された西洋式の建物の石柱などは、そのままの状態で見守られ、遺跡公園として公開されている。従って、テーマパーク化については「屈辱の歴史を冒瀆」との批判が起こっている。今年の1月に亡くなった陳舜臣の『中国の歴史』第13巻「斜陽と黎明」(平凡社、1983年)を紐解くと、幕末期に駐日公使となったパークスが中国では傍若無人に振る舞ったこと、「大略奪の主役は、文化の国と誇るフランスの軍隊だった」こと、58年に締結の天津条約がアヘンを公認する目的をもってしたこと、等々がわかる。アロー戦争が第2次アヘン戦争といわれる^{ゆえん}所以である。

概説書の^{たぐい}類もすべて一様ではない。良質な書籍を探すことも楽しみの一つであり、また「文化国家」とは何かを考えることも大切であろう。

なお、山内昌之氏に「文化遺産は誰のものか—対話の基盤として—」(『帝国のシルクロード—新しい世界史のために—』所収、朝日新聞出版、2008年)がある。